

〈論文〉

『想像の共同体』と『ペリキーリオ・サルニエント』

—B・アンダーソンの資料分析における問題点

花 方 寿 行

ベネディクト・アンダーソンの主著『想像の共同体』がその後のナショナリズム研究にもたらした貢献は多大なものであり、そのテーゼを受け容れ発展させるにせよ、これを批判し異なる方向性を模索するにせよ、無視することのできない重要な著作となっている。ネイションを実体として想定し、その政治的構造物としてネイション・ステーツを論じてきた従来のナショナリズム研究に対して、ネイションが想像されやがて実体であるかのように機能するようになる過程に注目したこの書物は、ラテンアメリカ文学研究者にとって、二つの点で特に興味深いものとなっている。第一には、アンダーソンが近代的ナショナリズムの揺籃期として、18世紀イスペインアメリカにおける社会的変化に注目し、これに一章（第4章）を割いていること。そして第二に、国民共同体を想像することを可能にした近代的時間意識を論ずるに際して、イスペインアメリカ最初の小説と見なされている、メキシコの作家ホセ・ホアキン・フェルナンデス・デ・リサルディ（1776-1827）の『ペリキーリオ・サルニエント』（以下著者はリサルディ、作品は『ペリキーリオ』と略記¹⁾）を例に挙げていることである。

こうした点への注目はアンダーソンの鋭さを示すものであり、イスペインアメリカ史理解に時として不備が窺われるとしても、彼自身の専門領域が東南アジアであることを考慮すべきであろう。ラテンアメリカ研究者とし

ては不備を徒に非難するよりも、これに補足修正を加えることによって、より生産的な結果が得られることを期待したい。

しかしながら、看過することのできない大きな問題も存在する。それが本論文で批判する『ペリキーリョ』の扱い方である。本文において詳述するように、アンダーソンはこの作品を全く読まずに、二次文献の記述にのみ基づいて論じている。このため彼は実際には自説を裏づけるには不適切な作品を例として取り上げ、議論を展開してしまっているのである。

自ら増補版への序文(アンダーソン1997:12)²⁾において認めているように、アンダーソンは初版執筆時にはスペイン語が読めず、『ペリキーリョ』と同一箇所において例に挙げているフィリピン作家、ホセ・リサルがスペイン語で書いた小説『ノリ・メ・タンヘレ』(以下『ノリ』と略記)も、英訳に基づいて論じていた。広範囲にまたがるテーマを扱う場合、時に翻訳に依拠することもやむを得ない。しかしアンダーソンが少なくとも翻訳は読んで利用した『ノリ』と、『ペリキーリョ』の場合は事情が異なる。本論において詳述するように、『ペリキーリョ』が『想像の共同体』の議論をより豊かなものにしたであろう示唆に富んだ作品であるだけに、アンダーソンのこの過失には看過できないものがあるのである。

I アンダーソンの「小説」論再考——『想像の共同体』における『ペリキーリョ』のコンテクスト確認のために

アンダーソンが『ペリキーリョ』に言及するのは、第2章「文化的根元」の後半部、「時間の了解」という小見出しの立てられたパートにおいてである。ここではまず、アンダーソンがいかなるコンテクストにおいて『ペリキーリョ』を論じているかを確認しておきたい。

この章でアンダーソンはナショナリズムの近代性を論じ、まずこれが他のイデオロギーと異なり、宗教的想像力と多くを共有することを示す。そして18世紀、宗教的思考様式が退潮する中で、「運命性を連続性へ、偶然を有意味なものへと、世俗的に変換する」(アンダーソン1997:34)要請

に応じたのが、国民という観念であったと、彼は想定する。宗教共同体と王国という、「聖なる共同体、言語、血統」(47ページ)に基づく政体が衰退する中で、国民を想像することを可能にする基盤として発展してきた新たな世界理解の様式が、近代的な時間観念である。

中世の宗教画においては、キリストやマリアが同時代のその地方の風俗を伴って描かれているが、普遍的な内容をこのように世俗的に肉化し伝達することは、当時の人々にとってごく自然なことであった。「中世キリスト教精神は、歴史を原因・結果の無限連鎖、あるいは過去と現在との根底的分離と理解することとはまったく無縁だったからである」(48ページ)。事件は時間の中で連続的に生起するものとしてではなく、時間を超越した聖なるものとの関係に即して秩序立てられる。アウエルバッハの同時性の観念、ベンヤミンのメシア的時間は、こうした前近代的時間意識を表すものである(49ページ)。

こうした時間意識が宗教意識と共に衰退するに従って、アンダーソンがナショナリズム成立の重要な鍵と見なす、新たな時間観念が生じてくる。これは「再びベンヤミンの言葉を借りるならば、『均質で空虚な時間』の観念であり、そこでは、同時性は、横断的で、時間軸と交叉し、予兆とその成就によってではなく、時間的偶然によって特徴付けられ、時計と暦によって計られるものとなった」(50ページ)のである。

小説という文学ジャンルにアンダーソンが目するものは、ここにおいてである。彼は小説と新聞という二つのメディアの基本構造を分析する必要性に触れ、これらこそが「国民という想像の共同体の性質を『表象』する技術的手段を提供した」(50ページ; Anderson 1991: 25 に基づき一部修正)とする。それでは彼が考える小説の構造とはいかなるものなのか。

アンダーソンによれば、「古風な小説の構造(中略)は明らかに『均質で空虚な時間』における同時性提示の工夫であり、それは『この間』という言葉についての複雑な注釈ともいえる」(50ページ)。アンダーソンが考える「古風な小説」においては、作中の時間経過に合わせて、複数の登場

人物が、異なる組み合わせで、異なる場所で、異なる行為をする様子が描かれる。ここでアンダーソンが重視するのは、AとBの口論、CとDの情事といった異なる事件が、同時に発生していることの表示を可能にする、「小説」の構造である。こうした「小説」では、同じ作品に登場するAとDという二人の人物が、同じ時間にそれぞれが行う行為が描かれながらも、直接的には一度も出会わずに終わるということもありうる(50-51ページ)。

アンダーソンはここで、作中では直接出会うことのない人物を、関係づけて読者に想像させることを可能にする、「二つの相互補完的な概念」(51ページ)に注目する。

第一に、かれらは「社会」(中略)にはめ込まれている。これらの社会はがっちりと安定した現実性をもつ社会学的実体であり、従ってその住民(AとD)は、たがいに知り合うことなく通りですれ違い、それでいてなお、たがいに関連しあっていると描写することができる。

第二に、AとDは全知の読者の頭の中にはめ込まれている。読者だけが、さながら神のごとく、AがCに電話し、Bが買い物をし、Dが玉突きするのを、すべて同時に眺めることができる。これらすべての行為が、時計と暦の上で同じ時間に、しかし、おたがいほとんど知らないかもしれぬ行為者によって行われているということ、このことは、著者が読者の頭の中に浮かび上がらせた想像の世界の新しさを示している。(51ページ)

このような作品構造が提示する「社会的有機体が均質で空虚な時間のなかを暦に従って移動していくという観念は、国民の観念とまったくよく似ている」(51ページ)。こうした考えに基づいてアンダーソンは、以下具体例として『ノリ』(1887)、『ペリキーリヨ』(1816)、そしてインドネシアの作家マス・マルコ・カルトディクロモの『黒いスマラン』(1924)(以下

『スマラン』と略記)を、この順番で取り上げる³⁾。

ここではもう一作、フィリピンの作家フランシスコ・バラグダスの『アルバニア王国におけるフロランテとラウラの物語』(1838)(以下『フロランテとラウラ』と略記)が論じられる。タガログ語の韻文で書かれ、中世アルバニアを舞台とするこの作品を、アンダーソンは「小説」の特徴を強調するために、それ以前の物語形式の例として利用している。『フロランテとラウラ』においては、「話の筋は、年代にしたがって解き明かされていくのではない。話は事件の途中から始まり、話の全体は一連の会話をフラッシュバックとしてわれわれに明かされる」(54ページ)とのフィリピン文学研究者ルンベラの指摘を受け、アンダーソンは次のように主張する。

「会話によるフラッシュバック」は、バラグダスにとって、直線的一列縦隊の話法に代わる唯一の手段だった。フロランテとアラディンの「同時的」過去を我々が知るとすれば、それは、かれらがこの叙事詩の構造によって結ばれているからではなく、二人の会話する声がかれらを結びつけるからである。この技法がどれほど小説の技法——「フロランテがなのおアテネで学んでいたその同じ春、アラディンは王の宮廷から追放された」——から隔絶していることか。(55ページ)

ここでいう「直線的一列縦隊の話法」とは、前後から判断する限り、同時に発生している事件を示すことなく、連続する出来事をリネアルに語ってゆく話法を意味すると考えられる。この話法ではクロノロジカルな記述は可能だが、アンダーソンの重視する、異なる事件の同時性は表現できない。それゆえ彼はこれを、「小説の技法」からかけ離れたものと見なしているのである。

さて、文学研究者による議論をいっさい参照することなく行われるアンダーソンの「小説」定義が含む多くの問題点については、ここでは詳述しない。ただしアンダーソンがあたかも自明のもののように主張している

「古風な小説の構造」が、一般に我々が小説と呼んでいるものの中でも、極めて限定された作品群にしか当てはまらないことは、確認しておく必要がある⁴⁾。

アンダーソンはまず、「小説」には多数の人物が登場し、それぞれが別々に行動し、場合によっては出会うことすらないものとしている。しかし彼らは全知の読者によって同時に眺められ、その頭の中にある一つの枠組みに収められるのである、と。この条件を満たすためには、この「小説」が全知の視点から語られていることが、前提として不可欠である。しかも『フロランテとラウラ』がいかに「小説の技法」から隔絶しているかを示すために挙げられた特徴から推測するならば、作品は基本的にクロノロジカルに、かつ同時に並行して起きる事件に言及しながら語られてゆくものであり、フラッシュバックによる過去の提示は、小説的な手法ではないとされる。そればかりではない、アンダーソンは『フロランテとラウラ』で語られる物語内容がフィリピンと関係がないことも、この作品を「小説」に含められない理由であるかのように強調している (55ページ)⁵⁾。

このようなアンダーソンの定義は、非常に多くの作品を「小説」から排除する。まず全知の視点が存在することを前提とするならば、一人称小説の大部分と、三人称一視点の小説は排除される。さらにフラッシュバックによる過去の提示を排除するならば、回想形式の作品も原則的に排除の対象となる。

しかも物語内容がその作者および読者として想定される人々の属する社会と結びついていなければならないとなると、「外国」を舞台とした作品も排除の対象となる。しかしこれに関するアンダーソンのコメントは、そもそも作者・読者の属するある「想像の共同体」を前提として、その「共同体」と物語世界の地理的・時間的距離の大小を問題としているもので、「小説」がこうした「共同体」の想像を可能にしたメディアであるとのテーゼからすれば、同語反復に陥っているといえる。

以上の問題点・限界を念頭に置いた上でアンダーソンのいう「古風な小説の構造」をまとめると、以下ようになる。

- 1) 作者および読者が共有する全知の視点から、登場人物の行動が同時に描かれている。
- 2) 作品はクロノロジカルに展開し、しかも作中の時間は作者および読者が共有する「均質で空虚な時間」によって計られる。回想のような時間の逆転は、あくまで部分的な例外にとどまる。
- 3) 登場人物および事件は、作者および（想定される）読者の属する「想像の共同体」の内部に位置づけられるべきものである⁶⁾。

もちろん我々はこれを、「古風」であるかないか以前に、一般的な小説の構造として承認することはできない。しかしアンダーソンが指摘する特徴を備えた作品の存在が、国民的想像力の働きを示すものであるとの主張までも否定するものではない。

さて、『ペリキーリョ』はこうしたコンテキストにおいて、『フロランテとラウラ』とは異なる近代的「小説」として、『ノリ』や『スマラン』と並べて挙げられる。ここではまず、『ノリ』と『スマラン』が共に冒頭の一節を引用しながら論じられているのに対して、『ペリキーリョ』についてはジーン・フランコによる内容紹介が引用されているだけだという点に注目する必要がある⁷⁾。これに続けてアンダーソンが加えているコメントについては、第IV節で改めて論ずることとする。

『ペリキーリョ』という作品自体を読んだことがなく、アンダーソンの孫引きに基づいてその内容を想像する者は、この作品が彼のいう「古風な小説の構造」に則った例と考えるだろう。だが問題は『ペリキーリョ』がそのような構造を持ってはいないこと、またアンダーソンがこの作品に付与した「近代性」が、スペイン語圏文学の歴史に関する彼の完全な無知の産物だということである。

Ⅱ リサルディと『ペリキーリヨ・サルニエント』——その実像

それでは問題となる『ペリキーリヨ』とは、どのような作品なのだろうか。

作者リサルディは1776年、メキシコのクリオーリョ一家に生まれ、まずは官吏として世に出るが、任地のタスコ市が反乱軍に包囲された際の対応を問題とされ、財産没収の上、投獄の憂き目に遭う。釈放後の1812年、リサルディは「メキシコの思想家 El pensador mexicano」というペンネームで、メキシコ市において文筆活動を開始する。当初はジャーナリスティックな文章を書いていたが、当局による検閲が厳しさを増すと、発表形式を改め、1816年の『ペリキーリヨ』を皮切りに、社会批判と民衆啓蒙を目的とした一連の小説を発表するようになる (Lizardi 1997: 9-12)。

1820年メキシコ憲法が制定されると、ジャーナリズムに復帰。しかし一貫してカトリック教会批判を行うリサルディは、スペイン統治下のみならず、独立後のイトゥルビデ政権とも折り合いが悪く、入獄を繰り返すことになる。1822年にはカトリック教会から破門宣告を受け、新政府によってジャーナリストとしての活動も禁じられる。その後破門宣告は撤回され、政府からもメキシコ独立への貢献を認められ、恩給と政府公報編集者の職を与えられるが、既に害していた健康は回復せず、1827年死去する (Lizardi 1997: 12-15)。

『ペリキーリヨ』は1816年、リサルディの最初の小説作品として、まず分冊形式で出版された。全5巻だが、第4巻は検閲によって発禁処分となった。ほぼ10年後、既に独立を達成した同じメキシコで、著者自身による加筆修正を施された第2版が準備されたが、1825年に第1巻を世に送ったのち、著者の死によって刊行は中断された。その後1830年から31年にかけて、初めて全巻を収めた第3版が刊行された。加筆修正も作者自身によるものと思われるこの版は、現在最も信頼できるものとされている (Lizardi 1997: 57-60)。

この作品は、死の床にある主人公ペリキーリヨ・サルニエントが、悪の

道に走った若き日の過ちを、子供たちが将来同じ轍を踏まぬよう、教訓として書き記した回想録という形式を取っている。第1巻では主人公の誕生から始まり、家柄と学歴ばかりを重視する教育が彼を高慢なだけの役立たずにしてしまう過程が語られる。第1巻末で父親が死ぬと、主人公は第2巻開幕早々、遊蕩三昧で遺産を食い潰し、母にも死に別れ、無一文で街頭に放り出される。生計を立てる術を持たぬペリキーリオは悪友に引きずられ、博打や窃盗に明け暮れるやくざな世界に足を踏み入れ、しまいには逮捕されるが、この間病院や監獄における虐待や腐敗、冤罪について見聞を深める。

第3巻では、出獄した主人公が床屋や薬剤師、医者、書記の助手、香部屋係といった職業を転々とし、その腐敗の実態を知る。また主人公による財産目当ての結婚と、妻に対する虐待、産褥による彼女との死別を通して、貧困家庭の問題も語られる。第4巻になると、悪徳判事の助手として職権を乱用したペリキーリオは捕らえられ、懲罰として軍務に服することになり、マニラに送られる。ここで、善良な大佐の下で心を入れ替え、働いて財産を成し、刑期があけ大佐が死ぬとメキシコに戻ろうとするが、船が難破、中国南部のとある島に漂着し、この一種のユートピアで法治国家のあるべき姿について見聞を深める。やがて西洋を見たいという中国人貴族と共にメキシコへ戻ったペリキーリオは、彼を騙して着服した金で再び遊蕩にふけるが、ついには悪事が露見して追い出される。第5巻で主人公は盗賊団に加わるが、一味は司直の手に掛かって皆殺しに遭う。一人逃れたペリキーリオは遂に完全に心を入れ替え、真面目に働き、かつての恩人に報い罪の償いをし、改めて妻を娶り、子供にも恵まれて幸せな余生を送る。本文の後に加えられた「付記」では、彼の晩年に親交を結んでいたリサルディが、ペリキーリオの死後その回想を読み、これが一般の人々にも教訓として役立つと考え、出版に至ったという「経緯」が語られている。

それではこの長編小説に、アンダーソンが言うような近代的時間意識を見出すことはできるのだろうか？ まずここで我々は、アンダーソンの極

めて初歩的な誤認にぶつかるのである。

Ⅲ 『ペリキーリョ』の構造と時間

アンダーソンがナショナリズム誕生の重要なきっかけと見なす、「均質で空虚な時間」の表象を可能にした「古風な小説の構造」は、果たして『ペリキーリョ』には存在するのだろうか？

アンダーソンが例に挙げている他の二作品においては、この「時計と暦によって計られる」(アンダーソン 1997:50) 同時性は、引用されるそれぞれの作品の冒頭部に、既に明示されている。『ノリ』は「十月末」(アンダーソン 1997:52)、『スマラン』は「土曜夕方、七時」(アンダーソン 1997:57) という、時計と暦によって特定されたある時間軸上の一点における社会集団の描写で幕を開けるのである。フィリピンやインドネシア社会を多数の登場人物の集合として描き、彼らの体験する事件をほぼクロノロジカルに記録してゆく手法は、この後も維持される。こうした構造が「小説の登場人物、著者と読者、すべてを抱擁して暦の時間に沿って進んでいく単一の共同体の堅牢さを暗に確証している」(アンダーソン 1997:53) というアンダーソンの評言は、納得のいくものである。

しかしながら、『ペリキーリョ』の幕開けはこれと全く異なる。この作品では、先に述べたような波瀾万丈のストーリーが、主人公の回想という形で、一人称で物語られる。冒頭、主人公は既に数ヶ月前から死の床にあることを述べるが、それが何年の何月のことなのかは全くつまびらかでない(Lizardi 1997:103)⁸⁾。主人公の死後、出版に至る経緯は、巻末の「付記」において、別人によるとはいえこれまた一人称で語られている。

登場人物の一人による一人称の語りは、そもそも全知の視点と相容れず、ここで既にアンダーソンの条件1)に反することになる。なるほど限定的視点に立った一人称の語りを採用していても、年月日や時間、歴史的イベントへの言及によって、物語を読者も共有する「均質で空虚な時間」に位置付けるような作品は——これはもはや構造上の特徴とはいえないが——確か

に存在する。しかし『ペリキーリョ』の構造は、これにも当てはまらない。この作品では、後に触れる唯一の顕著な例外を除いて、読者と共有されるべき年月日や時刻への言及はないまま、様々なエピソードが、主人公の身に降りかかる順番に従い、次々と羅列されてゆく。この構成は、アンダーソンが「小説」的ではないと見なしている、「直線的-列縦隊の話法」そのものである。

しばしば現在の主人公によってこれに加えられるコメントも、そこから読者のための一般的な教訓を引き出す役割を担うのみである。主人公がそこで、その出来事と同時的に起きていた物語内の、または社会的な事件を想起し、ある時間軸上の一点における他の人物や作品外世界をつなぎ合わせ、「横断的で、時間軸と交叉する（中略）同時性 simultaneity (...) transverse, cross-time」（アンダーソン 1997:50; Anderson 1991:24 に基づき一部修正）を提示することはない。誕生から死へと時間の中を移動しているのは主人公だけで、主人公の体験を通して描き出される社会は、「均質で空虚な時間」の中を移動しているとはいえないのである⁹⁾。

『ペリキーリョ』においては、主人公の前に次々と様々な職業や社会階層を代表する人物が現れては消えてゆくが、最終巻（第5巻）を除いて、再登場することはほとんどない。彼らがペリキーリョと出会う以前、あるいは別れた後に何をしているかは、全く問題にならない。もちろん例外的に再登場する人物もないわけではない。第1巻で学生時代の悪友として登場する金持ちのどら息子ファン・ラルゴは、主人公が修道院に入る頃からしばらく姿を消す。第2巻第3章で、完全なよた者に変貌して再登場してきたファンは、家畜の売買でごまかしをしたのが発覚し、叔父の農場を追い出されたといういきさつを主人公に語る。ファンが追い出されたのは再会の2週間ほど前という時間的な言及がなされてはいるが（p.337）、それが主人公の体験と結びつけられ、その同時性が示されることはない。ファンの説明は単に、彼が以前とは異なるタイプの悪党を代表して物語に再登場してきた理由を説明し、あわせて世の不正のさらなる一例（家畜売

買のごまかし)を紹介するために為されていると解される。この回想は、想起される内容が時間的に位置づけられる作中唯一の事例だが、これが「会話によるフラッシュバック」によって導入されていることも、忘れてはならない。再登場する例外のもう一人、善良ながらペリキーリョの悪事の片棒をかつがされるアンドレスは、最後まで幾度となく消えては現れるが、物語から姿を消していた間何をしていたのか、語られることはほとんどない。一度だけ再登場して捨てられる情婦ルイサも同様である。

先に述べたように、第5巻に進むと、それまでとは異なり、かつて重要な役割を果たした登場人物たちが次々と再登場してくるが、これも作品に「時計と暦によって計られる」同時性を導入することはない。ペリキーリョの獄房仲間として第2巻に登場済みのアギルーチョは、盗賊団の一員として再登場するが、それまでの十数年間に何があったかの説明は、全くない (p.834)。ファン・ラルゴは、盗賊団の頭目として処刑され吊された死体となっていきなり再登場する (pp.856-857)。善人側も同様で、恩返しをするべく彼らを探す主人公の前に、ほとんどの人物がかつと変わらぬ姿で現れる。やや長く再会以前の生活が語られるのは、監獄で主人公を助けたドン・アントニオだが、これは先に冤罪が晴れて財産を回復した状態で物語から姿を消した彼が、^{やつ}甕れ果てた姿で再登場した事情を説明するためである。しかもここで語られる事件は、具体的な記述はないが、再登場前の、長く見積もっても数年の間に起きたことである (pp.903-904)。

以上の例から分かるように、第5巻における人物の再登場は、勧善懲悪の教訓を示すために行われるだけで、ペリキーリョの物語と並行して、同時に各登場人物が体験したことを、フラッシュバックを用いて示すことすらほとんどない。従ってここでもまた、「直線的-一列縦隊の話法」は維持されているのである。

以上考察してきたように、『ペリキーリョ』を支配しているのは、「均質で空虚な時間」ではない。この作品では、あらゆる出来事はペリキーリョ

の直線的な語りの内部に配列される形で生起する。作中の時間は歴史的時間とも、他の登場人物の同時的な経験とも結びつけられることのないまま、この語りによって作り出される。事件を連続的に語る「直線の一系列縦隊の話法」が中断され、主人公のコメントがこれを読者への教訓や社会批判に変えると同時に、各エピソードは直線的な語りの流れから解放され、作者と読者として想定される人々にとっての同時代である、19世紀初頭メキシコ社会の諸相として、読者の前に拮げられる。主人公の誕生から死への時間的移動は、その空間的移動と同様、このパノラマを提示するために行われているのである。こうした時間の扱い方は、むしろアンダーソンが中世的時間の特徴とした、「時間軸に沿った同時性 simultaneity-along-time」(アンダーソン 1997: 50; Anderson 1991: 24) に近い。

この作品の構造全体も、『ノリ』や『スマラン』より、アンダーソンが時間意識の変化を強調すべく挙げたもう一つの作品、『フロランテとラウラ』に近い。『ペリキーリオ』は死の床にある主人公の姿という、いわば「話の終わり」から始まり、子供に伝えるための回想という「フラッシュバック」によってひとまず誕生という原点に立ち戻り、そこから「直線の一系列縦隊の話法」によって最後まで、その生涯が語り直されているのである。リサルディの登場する「付記」も、その後日談を直線的に付け加えるものであり、構造に大きな変化は見られない。

しかし終幕近く、この物語全体が暦によって計られる「均質で空虚な時間」と、極めて興味深い形で交差する場面がある。第5巻第8章、ペリキーリオが改心した後の後半生を語る中でも、最後に近い部分である。

我が中国人の主人が去った後も、数年に渡って、私はサン・アグスティン・デ・ラス・クエバスに住んでいたが、財産を処分してこの街（メキシコ市）に移り住む事を余儀なくされた。（中略）我が健康がここで回復するかどうかを試してみるためもあったし、1810年にこの副王領で起きた叛乱の結果から、財産を守るためもあった。ヌエバ・

エスパーニャにとってまことに致命的で破壊的な時代であった！ 恐怖と、犯罪と、流血と荒廃の時代であった！

この戦争の原因、過程やありうべき終わり方について、いかに多くの考察をお前たちに残すことができるだろうか！（中略）だがこの事についてメキシコで、1813年に物を書くというのは、非常に危険なことなのだ。（中略）今はいかなる国（nación）や王国（reino）にとっても、あらゆる悪の中で戦争が最も酷いものであることを知っておればよい（中略）。しかしこのようにその本性からして憎むべき事柄からは筆を離し、我が物語の頁をアメリカ人の血で染められた時代の記憶で汚すのはやめようではないか。（pp.917-919、訳文および括弧内引用者）

ここに至って初めて、ペリキーリヨの物語は歴史的時間の中にはっきりと位置づけられる¹⁰⁾。しかしながら、1810年に始まる独立運動は、「メキシコ」という「想像の共同体」が国家として立ち上がる過程でありながら、主人公の移住の理由の一つとして挙げられているだけで、その体験を通して物語に組み入れられることなく終わってしまう。引用文中で述べられているように、リサルディは独立運動の帰趨が不確定な段階で立場を明確にすることの危険性を意識しており、そのことが独立運動を物語に直接組み入れることへの躊躇につながったことは、十分考えられる。しかしそれ以上に、独立運動という歴史的事件を、同時的に存在するものとして、年号によって主人公の体験に結びつけるこの記述は、『ペリキーリヨ』という作品の構造上、きわめて異質なものである¹¹⁾。

とはいえリサルディ=ペリキーリヨは、「メキシコ人」読者には無縁の事柄を語っているわけではない。彼は主人公の体験が読者（ペリキーリヨにとっては息子たち）を過ちから守る役に立つと考え、この作品を執筆（作中のペリキーリヨ、現実のリサルディ）し、公刊する（作中および現実のリサルディ）。ここで注目すべき事は、リサルディ=ペリキーリヨが、

独立戦争によってメキシコ社会が植民地時代とは一線を画し、全く新しい体制に移行したとは考えていない点である。1810年以前の社会を生きたペリキーリオの体験は、独立によって一気に脱却されるはずの「旧体制」の社会問題の描写としてではなく、1816年以降のメキシコを生きる読者にとって、役に立つ教訓として示されている（pp.938-940）。つまりペリキーリオの体験は本来、作中に示される年号から逆算して「均質で空虚な時間」の中に位置づけられ、過去の社会の再現と見なされるべきものではなく、読書行為が行われている、作者及び読者と想定される人々にとっての現在、即ち19世紀初頭のメキシコ社会の諸相を描くものとして、パノラマ的に眺められるべきものなのである。そのためにも彼の経験を過去に位置づけ、読者との間に時間的な距離を生じさせる可能性のある、1810年という「均質で空虚な時間」の暴力的な介入は、速やかに排除されなければならなかったのである。

さて、『ペリキーリオ』の構造に示される時間意識が、アンダーソンが例として取り上げるのに不適切であることは、以上で明らかになったものと思われる。それでは彼がJ・フランコによる粗筋紹介に見出したこの作品の特性は、『ペリキーリオ』の近代性を示すものとして適切なものなのだろうか。ここで次に問題となるのは、アンダーソンのスペイン語圏文学史に関する無知である。

IV 遍歴する主人公と「社会学的風景」——ピカレスク文学の伝統における『ペリキーリオ』

アンダーソンはJ・フランコによる『ペリキーリオ』の粗筋紹介を引用した後、次のようなコメントを加えている。

ここでもまた我々は、ひとりぼっちの主人公が小説内の世界とその外の世界を溶接する確固とした社会学的風景のなかを移動していく、その動きのなかに、「国民的想像力」の作動しているのをみる。しか

し、このピカレスク風の地平一周——^{トゥール・ドリゾン}病院、^{ホスピタルズ}牢獄、^{プリズンズ}辺鄙な村々、^{リモート・ヴィレッジズ}僧院、^{モナステリーズ}インディアン(ズ)、^{トゥール・デュ・モンド}ネグロ(ズ)——は世界一周ではない。地平ははっきりと囲われている。それは植民地メキシコの地平である。そしてなによりもこの社会学的堅牢さを確実に保証するのが複数形の行列である。なぜなら、こうした複数形の行列こそ、同等の牢獄、そのどれもがそれ自体としてはいかなる意味でも固有の重要性をもたず、それでいてすべてが(同時に別々のところに存在するまさにそのことによって)この植民地の抑圧性を表象する、そうした牢獄でいっばいの社会空間を目の前に思い浮かばせるからである。(アンダーソン 1997: 56; Anderson 1991: 30 に基づき引用者による一部修正)

この一節にはさらに、「確固とした社会学的風景のなかを主人公がひとり移動していくというモチーフは、多くの(反)植民地小説に典型的にみられる」(アンダーソン1997: 71)という注も付けられている。引用文以前の作品紹介は、やはりあくまでフランコの受け売りに過ぎないため、以上が『ペリキーリョ』に対するアンダーソン自身のコメントのほぼ全てである。

前節で詳しく論じたように、アンダーソンがナショナリズム成立を可能にしたと考える近代的な時間意識を『ペリキーリョ』の構造に見出すことは、作品自体からも、フランコの粗筋紹介からも不可能であり、彼がこれを理由にこの作品を例に挙げたとは考えられない。とすればアンダーソンは、上述のコメントにおいて示された特徴ゆえに、『ペリキーリョ』を(反)植民地小説として重要視していることになる。

しかしこのような解釈は、『ペリキーリョ』をスペイン語圏文学史のコンテクストに置いてみると、極めて問題のある見解と言わざるを得ない。この作品は長い伝統を誇るピカレスク小説のジャンルに属するものであり、アンダーソンの指摘はこのジャンル一般に当てはまるからである。

改めて詳述するまでもないが、16世紀半ばに世に現れた作者不詳『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』を嚆矢とするこのピカレスク小説というジャンルは、スペイン文学史だけを見ても、マテオ・アレマンの『グスマン・デ・アルファラーチェ』（前篇1599年、後篇1604年出版）、ケベードの『ペテン師ドン・パブロスの生涯』（1626年出版）と、黄金世紀文学における最も重要な作品の幾つかを含んでいる。翻訳紹介に伴う『グスマン』の国際的な成功は、17世紀から18世紀にかけてヨーロッパ全体にピカレスク文学のブームを引き起こし、フィールディング、ディケンズ、さらにはアメリカのマーク・トゥエインの作品にまで影響をおよぼした、一大文学潮流である。

これ以上踏み込むとかえって論点が散漫になる恐れがあるので、ここではスペイン黄金世紀における元祖ピカレスク小説の特徴をまとめた牛島の定義（牛島1997：151）を参考に挙げよう。

- 1) 主人公が下層階級の出身で、社会の寄生虫的な存在である。
- 2) 主人公が話者となって、一人称体でみずからの体験を語る。
- 3) エピソードが次々と並列的に挙げられ、前後の脈絡はあまり重視されない（中略）。
- 4) 連ねられるエピソード（すなわち主人公の社会遍歴）を介して、社会の諸相の汚濁や悪があばかれる。

このうち『ペリキーリョ』に当てはまらないのは、第1項のみである。ペリキーリョは中流階級の出であり、財産を食い潰して初めて下層階級に転落する。しかし転落以前の生活を描く第1巻がピカレスクの「王道」を外れるとしても、第2巻冒頭で主人公が零落して後の展開は、ほぼ定型通りである。『ペリキーリョ』カテドラ版の編者ルイスによれば、ガルシア・デ・パレダスはその論文で、この主人公の出自や性格設定をもって、ペリキーリョを本当のピカロとは言えないとしているが、それでもこの作

品と『グスマン』を始めとするピカレスク小説の構造上の類似は認めているという (Lizardi 1997: 37-38)¹²⁾。

また同じくルイスによれば、リサルディは『ペリキーリヨ』執筆以前に、フランス人作家ルサーージュが書いたピカレスク小説『ジル・ブラス』をスペイン語訳で読んでおり、啓蒙思想とピカレスク小説形式の組み合わせという『ペリキーリヨ』の着想が、このフランス・ピカレスク小説の影響を受けている可能性もあるという (Lizardi 1997: 39-40)。

こうした文学史的コンテクストを念頭に置いてみるならば、アンダーソンのコメントの問題点は一目瞭然であろう。「ひとりぼっちの主人公が…確固たる社会的風景のなかを移動していく」というのは、『ペリキーリヨ』の独自性ではなく、ピカレスク小説の定石なのである¹³⁾。

主人公の移動に加えてアンダーソンが重要視している要素に、名詞複数形の使用がある。ここに『ペリキーリヨ』を従来のピカレスク小説から区別する特色は見出せるだろうか？ しかしここでもリサルディの手法は、定石からはずれるものではない。集団として現れるインディオと、主人公が異なる立場で異なる体験をするために異なる章で何度か訪れることになる「辺鄙な村」を除けば、物語内に登場する病院・監獄等の場所や、主人公の会おう黒人は常に単数で登場する。主人公の職業体験に伴い同じ職種・社会階層の人物が複数出てくる場合には、各々がその職業の異なる側面を分担している。個々のケースが「複数形」へと変化するのは、同じような腐敗が世に溢れていることを指摘するリサルディ＝ペリキーリヨのコメントをもってである。これがアンダーソンの言う「複数形」の使用であるならば、確かに『ペリキーリヨ』で繰り返し用いられる手法と言える。しかしこの手法もまた、既に『ラサリーリヨ』で用いられているものなのである¹⁴⁾。

従ってアンダーソンが『ペリキーリヨ』において注目した、遍歴する主人公と彼を取り巻く社会構造の関係や「複数形」の使用は、実際にはピカレスク小説を特徴づけるものである。もしこれらがナショナリズム成立を

可能にする要因であるというテーゼを認めるならば、ナショナリズムを18世紀後半に出現したものとするアンダーソンの主張（アンダーソン1997：34）に反して、我々は16世紀に書かれた『ラサリーリョ』に、既にしてスペイン・ナショナリズム成立を可能にする国民的想像力が作動していると考えなければならなくなる。

この問題はしかし、第Ⅲ節で論じた時間意識の場合とは異なり、アンダーソンの主張に再考を迫るものではあっても、これを完全に無効にするものではない。イデオロギーや運動としてのナショナリズムは18世紀後半に起こったものであっても、「ナショナル」な感情の存在は、15世紀ないし16世紀後半には、既に西ヨーロッパで確認されているからである（スミス1999：13-14）。そうだとすれば、16世紀後半から18世紀にかけて、「国民的想像力」が水面下で既に働いていたとしても、おかしくはない。とはいえ、この点はピカレスク小説全体とナショナリズムの関係としてさらに精緻な分析を行うべきものであって、『ペリキーリョ』一作の特性として論じられるべきではないことに、変わりはない。

さて、アンダーソンは『ペリキーリョ』に加えたコメントにおいて、もう一つ重要な要素として、この作品の「閉ざされた地平」に言及している。この点については、節を改めてより詳しく論ずることにしよう。なぜならここには「想像の共同体」と実際に誕生する「ネイション・ステーツ」のずれという、極めて重要な問題が秘められているからである。

V 「閉ざされた地平」の可変性——「想像の共同体」の周縁部

先に引用したコメントのなかで、アンダーソンは『ペリキーリョ』の舞台となる世界について、次のように述べている。「このピカレスク風地平一周（中略）は、世界一周ではない。地平ははっきりと囲われている。それは植民地メキシコの地平である」（アンダーソン1997：56；Anderson 1991：30に基づき引用者による一部修正）。『ノリ』や『スマラン』へのコメントにおける「フィリピン」「インドネシア」という言葉の用い方か

ら類推して、アンダーソンがこの「植民地メキシコ」という言葉によって、やがて「メキシコ」という国家として独立すべき「想像の共同体」を指していることは、間違いない。そこには「複数形の行列」によって確実なものとなるような「社会学的堅牢さ」が既に存在するが、それが独立を可能にする単位（祖国）として意識されるためには、こうした一連の社会的要素を含むある一定の地理的空間が、一つの行政的政治的中心と、それに向かって収斂してゆく周縁部から成る構造として、住民に認識される必要がある。アンダーソンによれば、それを可能にするのが各行政単位内においてほぼ完結する人の流れ、「旅」である。こうした「旅」は、その単位内における多様な人々との出会いを可能にし、相互連結意識を育むと同時に、自分達がそこから先へ渡ってゆくことができない、そのような政治的限界点を領土的境界として意識させるのである（アンダーソン1997：98-101）。

アンダーソンによれば、イスマノアメリカにおいてこの条件に当てはまる行政単位は、各副王領であった。副王領内部での人的な移動が住民を結びつける一方、ある副王領出身の役人が他の副王領に移動することはあまりなく、隣接する副王領間の境界が意識されるようになる。またスペイン本国において定められた法律によって、その出身地ゆえに重要な官職から閉め出されているという事実が、クリオーリョをして、スペインとイスマノアメリカの間に一線を画す意識を育ませる。それが最終的にイスマノアメリカのスペインからの独立と、旧副王領を単位とする国家形成を可能にする、「想像の共同体」形成のプロセスだったというのが、彼の考えである（アンダーソン1997：102-103）。こうした観点からすれば、アンダーソンが『ペリキーリョ』における主人公の遍歴に注目し、かつその地平が「植民地メキシコ」という閉ざされた空間に尽きることを強調したのは、当然であろう。

しかしアンダーソンは、『ペリキーリョ』を読まずに自説の論拠としたがために、ここで大きな過ちを犯してしまっている。即ち、ペリキーリョ

の旅は、「植民地メキシコ」の地平にとどまっていけないのである¹⁵⁾。

この作品の大部分は、確かに2002年現在のメキシコ領内、それもメキシコ市内において展開する。それ以外に登場するのは、メキシコ市から馬で数日程度の距離にある農園や村にほぼ限られる。しかし第4巻は、この「地平」を大きく逸脱する。第Ⅱ節で紹介したように、ここで主人公は懲罰として軍務に服させられ、アカプルコを經由して船でマニラへと送られる。さらには難破によって中国南部にまで漂着するのである。この巻の全10章のうち、半分以上の6章がメキシコの外を舞台としている。しかも興味深いことに、『ペリキーリョ』全5巻のうちこの巻のみが発禁処分を受けたのであり、それもマニラでの体験を描いた第4章が問題とされたのである。

さて、第4巻において、アンダーソンの理論と関わって重要な意味を持ってくるのは、主人公の遍歴する地平の「開かれ」方である。主人公はメキシコを離れフィリピンへ、そして中国南部へと「旅」をする。この「旅」は、アンダーソンの主張するところの、共同体を想像させる「旅」と、どの程度重なり、どの程度異なるものなのだろうか？

このうち中国南部への「旅」は、アンダーソンの主張する「旅」とは異なるものと考えられる。このパートで用いる中国の言語や地名、習慣については、リサルディはゴンサレス・デ・メンドサ神父の記録を参照している (Lizardi 1997: 752)。参照可能な資料の存在は、極東も既にカトリックのネットワークに組み込まれており、全く未知とはいえない領域であることを示している。しかし主人公のみならず、この島にいるヨーロッパ人すべてが難破の結果漂着しているという設定を考慮すれば、ここは通常の通商ルートから外れた場所として想定されているものと考えられる。また全ての住人が何らかの労働に従事している厳格な法治国家として示されるこの島が、資料に基づく描写を含みながらも、一種のユートピアとして提示されている事も考慮する必要がある。ここは『ペリキーリョ』全編で批判されてきた、自ら労働することのない社会的寄生者が溢れ、法の執行者

が法を曲解し、腐敗が横行するメキシコの現状とは、正反対の社会である (Franco 1996:43)。この意味で「中国」は、メキシコを批判的に映し出す鏡として、ペリキーリヨが本来属し遍歴する地平の「外」に想定されており、一方そこに描かれているのは、逆さ鏡に映った地平の「内」であるといえる。

これに対してフィリピンは、より微妙な意味合いをもっている。ペリキーリヨはここで8年間暮らしたことになっているにもかかわらず (Lizardi 1997:736)、フィリピンを舞台にする二つの章で、その社会や風土の描写は全くなされない。これは中国での体験を扱った同じく二つの章が、この土地の社会制度や風俗の描写に終始しているのと対照的である。さらにフィリピンで起きたことになっていても、恩人である大佐の死を扱った第5章では、主人公のメキシコへの愛情と、メキシコに横行する腐敗を憎む気持ちとの葛藤が中心的に扱われている。

興味深いのは、第4章で扱われる事件の性質である。ここでは一章を割いて、イギリス士官と黒人との喧嘩の仲裁に入ったことをきっかけに、黒人を劣等視する概念がいかに根拠のないものであるかをペリキーリヨが知り、奴隷制度を批判するようになる過程が語られている。ここで批判される奴隷制は一般的なものか、スペイン植民地世界におけるものとしてはキューバの奴隷制であり、作中ではフィリピンともメキシコとも結びつけて論じられてはいない (Lizardi 1997:727-728)。にもかかわらずリサルディは、フィリピンを舞台にした僅かな頁の大半をこれに割き、さらにメキシコの副王領当局は、このくだりが奴隷売買を合法とするスペインの政策を批判していることを理由に、第4巻全体を発禁処分としたのである¹⁶⁾。

何故リサルディは主人公をフィリピンに送りながら、フィリピンを描くかわりにキューバの奴隷制を批判したのだろうか？ また何故メキシコの副王領当局は、インディオ搾取を始めとするヌエバ・エスパーニャ副王領内の腐敗を批判したパートの出版を許可してきたのに、キューバの黒人奴隷制批判を理由に第4巻を発禁処分に付したのだろうか¹⁷⁾？

この一見不可思議な事態は、リサルディが想像する「共同体」と、彼が体験的に知っている「共同体」の間にずれが存在することを念頭に置いてみて、初めて理解できる。逮捕されたペリキーリョは、懲罰のため強制的に軍務に服させられ、フィリピンへ送られる。こうしたフィリピン行きは監獄同様、リサルディにとってメキシコの「確固たる社会学的風景」の一部を成すべき体験であり、難破船の漂着のような特殊な経験ではなかった。またフィリピンという土地も、境界の向こうにある中国とは異なり、その社会制度や風俗を文献に基づいて詳しく紹介する必要のない、内部のはずだった。にもかかわらずリサルディは、メキシコを舞台にしたここまでのパートと同じ筆致で社会批判をするに必要な知識を、フィリピンについては全く持っていなかったのである。「外」ではないフィリピンは「内」を映す鏡として機能するべきトポスにはなり得なかったが、かといって「内」として従来と同じように主人公を旅させるには、あまりにも遠い周縁部だった。そして文献資料に基づいてフィリピンを描写するには、まずフィリピンがメキシコとは異なる社会＝「外」であることを意識する必要があるのだが、リサルディはこの切り替えを行わなかったのである。

かくしてフィリピンにやってきたペリキーリョは、ここで完全な白紙状態で停止を強えられる。メキシコを内側から描くパートと、中国という鏡に映して外側から描くパートの境に生じたこの空白に書き込まれるのが、キューバの奴隷制批判である。リサルディの意識においては、インディオ搾取はメキシコの問題だったが、黒人奴隷制度はそうではなかった。さもなくば、スペイン植民地世界における奴隷制を批判する中で、キューバを槍玉にあげながら、メキシコには言及しないことの説明が付かない (Lizardi 1997: 727-728)¹⁸⁾。従ってペリキーリョのメキシコ遍歴を通してこの問題を批判することは、リサルディにとって不可能であった。しかしそれでもなお、リサルディはキューバの奴隷制を、メキシコとは異なる外国の問題とは考えておらず、それゆえこれを批判するスペースとして、「フィリピン」という空白を利用したのである。またメキシコの副王領当局者に

としては、リサルディがスペイン政府の政策を批判していることが問題であった。それゆえメキシコ内部に限れば特に問題ではないはずのこの批判が、「国王によって許可された商業活動」(Lizardi 1997:721)に対する攻撃として、検閲の対象となったのである。リサルディにとっても、副王領当局にとっても、キューバの奴隷制は「自国」の問題だったのである。

リサルディの意識における、このような「想像の共同体」の輪郭のずれは、「スペイン人 español」という単語の用い方にも現れている。メキシコ社会の内部において、この単語は「混血をしていないスペイン系住民」という意味で用いられている。監獄に入れられたペリキーリョが他の受刑者からかわれる場面や、村の司祭が埋葬料をあこぎに取り立てようとする場面が、この例に挙げられる(Lizardi 1997:425, 676)。また第4巻第4章で、外国人である黒人は、一貫してペリキーリョを「スペイン人」と呼んでいる。こうした自己認識を考慮すれば、リサルディ=ペリキーリョが、自分の祖国を「我がスペイン」と呼ぶことには、何の不思議もない(Lizardi 1997:295, 573)¹⁹⁾。

しかしそれではリサルディにとって、メキシコとスペイン本国の区別が存在しないのかというと、そうではない。第4巻第5章でマニラにいるペリキーリョは、メキシコへの望郷の念を当然の感情とする大佐に対し、次のように言う。

祖国 (patria) をそこで生まれたという理由で、あるいは人間を互いに結びつける関係ゆえに愛するのは正当なことでしょう。しかしそれは自分が祖国の子であると考えた人々や、祖国が母としての役割を果たした相手に限ってのことです。私のように、祖国が継母のように振る舞った相手はそうは思いません。(中略) いいえ、閣下、むしろあの家並みや遊歩道、オリーリヤ、イシュタカルコやサンタ・アニータ、あるいはサン・アグスティン・デ・ラス・クエバス、サン・アンヘルやタクバヤといったもののために、あれを母と認める方がいいの

です。(Lizardi 1997: 738-739 訳文引用者)

ここではペリキーリョが「祖国」と呼び、批判しているのも、ノスタルジーを抱いているのも、共に自分が体験的に知っているメキシコである。そしてマニラを離れるときに、戻るべき祖国として意識されるのも、やはり明らかにメキシコである (Lizardi 1997: 742)。一方ペリキーリョはマニラからの帰路、船上で財産の使い方を思案し、マドリッドに赴き爵位を得た上で、メキシコに戻って大地主になることを空想する (Lizardi 1997: 744-745)。リサルディもペリキーリョも現実には足を踏み入れなかったとはいえ、スペイン本国は金のあるメキシコ出身者にとって、可能な「旅」の範囲内にあると想像されている。その上でペリキーリョは、最終的に戻るべき「祖国」としては、やはりメキシコを意識しているのである。

以上考察してきたように、リサルディ=ペリキーリョは帰属すべき「共同体」を、スペイン帝国全体からメキシコ市を中心とする比較的狭い空間までという、極めて伸縮自在な輪郭を持つものとして想像している。これは副王領単位に限定された形で「共同体」が想像されるようになったことが、18世紀イSPANアメリカにおけるナショナリズムの発生につながったとするアンダーソンの解釈と、一見矛盾するかに思われるやもしれない。しかしこの揺らぎを明確に認識することこそ、重要なのである。イSPANアメリカ諸国独立の基盤となった「想像の共同体」は、まさに住民によって想像されたものであるからこそ、地理的輪郭は曖昧で、同じ人間が想像する場合ですら、時としてその領域が異なることもあり得るのである。そこにこそ、最終的に副王領をおおよその単位として成立するイSPANアメリカ諸国の独立運動が、シモン・ボリーバルの汎アメリカ主義と同時に存在し得た理由があるのではないだろうか。また「想像の共同体」の境界の曖昧さは、周縁部の帰属をめぐる紛争の火種ともなる。メキシコへの帰属が最後まで揺れ動いた地域の一つがチアパス州であることも、忘れてはならない。

VI おわりに

以上考察してきたように、『想像の共同体』におけるアンダーソンの『ペリキーリョ』分析は、極めて多くの問題を含んでいるものであり、その功罪は相半ばするものといえよう。近代ナショナリズムの形成過程を例示する素材としてこの作品に注目したのは、確かにアンダーソンの慧眼のなせる業であった。しかし彼は研究者として本来なすべき作業を怠り、この作品を読まずに利用した。そのため彼はおよそ見当違いのコメントを残しただけでなく、本論文で指摘したような、自説をさらに精緻にしたであろう貴重な示唆の存在に、気づかずにおわってしまったのである。

注

- 1) 本来「フェルナンデス・デ・リサルディ」が姓ではあるが、本論文では通称として定着している「リサルディ」という表記を用いることとする。なお、スペイン語研究書では、本文中で“Lizardi”を用いていても、索引や文献リストにおいては“Fernández de Lizardi”と正確に表記するのが一般的である。しかし本論文参考文献リストでは、混乱を避けるため、Lizardiのみを姓として立項する。
- 2) 以下本論における『想像の共同体』の引用は、原則として邦訳(1997)を利用し、第I節中の引用には、煩雑さを避けるため、同書に対応する頁数のみを付すこととする。英語原表現を併記したり、訳に一部修正を加える必要が生じた場合には、文献表示の箇所にも原書(1991)の対応頁数を併記したうえ、その旨を明記する。
- 3) アンダーソンが例示する作品は全て、やがて植民地支配を脱して独立する地域において、独立に先立って出版されたものばかりである。しかしながら『ペリキーリョ』出版が『ノリ』に70年も先立ち、『フロランテとラウラ』と比べても20年以上早いことを忘れてはならない。この70年の差は、ナショナリズムの発展においてと同様、小説形式の確立と普及を考える上でも、無視できぬ重みを持っている。
- 4) 小説の視点や語りと時間の関係については、ジュネット(1985)、リクール(1987-88)参照。また「古風な」という曖昧な形容詞はこの場合、ジョイスやフォークナーの作品の如き、20世紀の(特に時間操作において)実験

- 的な小説を除外するために加えられたものと解釈できる。
- 5) もちろん『フロランテとラウラ』が長編詩である以上、これを「小説」と呼ぶことはできない。しかしアンダーソンが強調しているのは、この形式的な属性ではない。
 - 6) これはそもそも構造的特徴ではなく、内容の種類である。
 - 7) アンダーソンが依拠しているのは、Franco (1969) 1冊のみである。本論で後に詳しく論ずる、『ペリキーリオ』とピカレスク文学の関係や、主人公の旅する領域については、同じフランコのものでも、Franco (1996) では言及がなされている。後者の英語版原書は1973年の刊行であり、アンダーソンは参照することが可能だったはずである。
 - 8) 以下、第Ⅲ節における『ペリキーリオ』の引用については、煩雑さを避けるため Lizardi (1997) に対応する頁数のみを記すこととする。
 - 9) 例えば第2巻第6章では、盗みの片棒を担ぐよう誘われた主人公が「夜の9時」(Lizardi 1997: 390) に相棒を捜しに出かける。しかしこの時刻は、同時に起きているいかなる作品内外の出来事にも結びついておらず、単に夜が更けていることを示すのみである。
 - 10) 「付記」においてリサルディは、ペリキーリオの死後、未亡人を説得して本書の出版にこぎつけるまで3年かかったとして、1813年の「執筆」から1816年の出版までの過程を、「均質で空虚な時間」の中に位置付ける (Lizardi 1997: 937)。
 - 11) リサルディ=ペリキーリオは独立戦争への言及に続いて、戦争一般を批判した上で、次のように述べている。「善き市民はただ祖国共通の利益がかかっている場合にのみ武器を取るべきである (後略)。／ただその場合にのみ剣を握り盾に腕を通すべきであり、コムネーロスが喧伝する結果がいかにも心地よいものであろうと、それ以外の場合にはするべきではない」(Lizardi 1997: 919 訳文引用者) ここで言及される「祖国」が、スペインを指すのか、メキシコを指すのかは、曖昧である。リサルディ自身が独立支持を表明するのは、1821年になってからである (Lizardi 1997: 13)。
 - 12) なお、ペリキーリオが中流階級の出であることは、彼の最終的な更正・成功と関連している。繰り返し描出されるリサルディの下層階級への差別意識 (Lizardi 1997: 445-446, 886-887) は、階級差に基づく社会構成を肯定するリサルディの社会観 (Lizardi 1997: 53) の現れである。こうした意識はリサルディを同時代の革命思想より、『ドン・パブロス』におけるケベードの反動性 (牛島1997: 289-231) に近づけるものである。
 - 13) この誤解は、アンダーソン自身が主人公の遍歴に「ピカレスク風 *picaresque*」という形容詞を加えていることを考えると、極めて奇妙なものに思

- われる (Anderson 1991:30)。アンダーソンはこの語の起源を知らず、19世紀以降の文学作品の特徴を示すものと信じていた、と考えるほかない。
- 14) 例えば『ラサリーリョ』第5章に登場する免罪符売りはただ一人だが、章末で語り手の加える「いかに多くのこうした連中が」(Blecua 1984:169 訳文引用者) というコメントが、これを複数形に転換する。
- 15) 参考までに他の代表的ピカレスク小説における地平の閉ざされ方をみておこう。『ラサリーリョ・デ・トルメス』と『ペテン師ドン・パブロス』の主人公は、ほぼ旧カスティーリャに限定された地平を旅している。『グスマン』やピセンテ・エスピネルの『マルコス・デ・オブregon』(1618)の主人公は、イタリアやアルジェにも渡るが、地中海沿岸のこれらの地域が、16-17世紀のスペイン人にとって、十分移動可能な「地平」内にあったことを忘れてはならない。
- 16) 現行の版には、当局による発禁処分の通達が、リサルディ自身によって挿入されており、そこには奴隷売買批判が問題になったことが明記されている (Lizardi 1997:720-721)。
- 17) インディオ搾取批判は、第3巻第4・5章や、第4巻第1章にみられる。
- 18) リサルディが当局との対立を避けるためメキシコには言及しなかったという可能性もあるが、その場合、スペイン植民地世界における奴隷制を代表させるコンテクストの下での、キューバへの言及も避けたであろうと考えられる。またペリキーリョはメキシコの監獄でも黒人に会っているが、ここでは奴隷制に対する言及は全くなく、ただ黒人・ムラート・インディオの置かれている、貧困や教育の欠如といった社会的悪条件が問題とされるだけである (Lizardi 1997:445-446, 450-451)。
- 19) ペリキーリョが中国で出会い、メキシコまで道中を共にするもう一人の「スペイン人」のアイデンティティーは曖昧である。彼はメキシコに住んでいたことがあり、領事職に就いていたという (Lizardi 1997:765)。彼はメキシコ到着後も一貫して「スペイン人」と呼ばれ続けるが、その正確な出身地は、最後まで不明である。

文献リスト

- アンダーソン、B. 1997.『増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』白石さや・白石隆訳、NTT 出版。
- 牛島信明、1997.『スペイン古典文学史』名古屋大学出版会。
- ジュネット、G. 1985.『物語のディスコース——方法論の試み』花輪光・和泉涼一訳、水声社。
- スミス、A. D. 1999.『ネイションとエスニシティ——歴史社会学的考察』巢山

靖司・高城和義他訳、名古屋大学出版会。

リクール、P. 1987-88. 『時間と物語——フィクション物語における時間の統合形象化』(全二巻) 久米博訳、新曜社。

リサール、J. 1976. 『ノリ・メ・タンヘレ——わが祖国に捧げる——』 岩崎玄訳、井村文化事業社。

Anderson, Benedict. 1991. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, rev. ed. (London, New York: Verso).

Blecua, Alberto (ed.). 1984. *La vida de Lazarillo de Tormes y de sus fortunas y adversidades*, 3^a ed. (Madrid: Editorial Castalia).

Franco, Jean. 1969. *An Introduction to Spanish-American Literature* (Cambridge: Cambridge University Press).

—————1996. *Historia de la literatura hispanoamericana*, edición revisada y puesta al día, Trad. de Carlos Pujol (Barcelona: Editorial Ariel).

Lizardi, José Joaquín Fernández de. 1997. *El Periquillo Sarniento*, Ed. de Carmen Ruiz Barrionuevo (Madrid: Ediciones Cátedra).